

---

# 私の中の『海』

深水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の中の『海』

### 【Nコード】

N0227C

### 【作者名】

深水晶

### 【あらすじ】

中学生は、半端な生き物だと思う。大人でも子供でもない。私の中の『海』は、私の体内で満ち引きを繰り返す。私は私の中の『海』を殺しながら、生きている。中学二年の水原和紗は、母と二人暮らし。趣味は読書。校内で唯一話をする相手は、図書委員で一学年下の笠間篤志。クールな不思議少女と元気で明るい少年のラブストーリー。

## 第一話 好きなもの、嫌いなもの

ひたひたと、『海』が押し寄せてくる。

爪先から、少しずつ満たし、沈め、引きずり込んで、私を支配する。

私の中の『海』は、私の体内で満ち引きを繰り返す。

爪先からかかと、くるぶし、膝、腰、肩先、肘、手首、指先へと、少しずつ満たして。

今ではすっかり内臓までも支配して、喉元から溢れんばかりに満ちる『海』。

その塩辛さに、喉が引きつり、嘔せながら『水』を求める。

望む水は既に全身を埋め尽くしているのに。

喉の渴きを覚えた途端、海岸だった風景は、灼熱の砂漠へと変化する。

砂漠　　いいえ。

ここはかつて海であった場所。

その証拠にまだピチピチと跳ねている魚がいる。

砂の中に潜り込もうとする貝がいる。

砂に張り付いて身動き出来ないクラゲがいる。

何故？

だって私の中に『海』があるから。

私の中に『海』がいるから。

この『海』を解放しない限り、このかつて海だった場所は死の砂漠と化するだろう。

こんな塩だらけの砂漠では草木が生える事も無い。

死んでゆく魚たち。

乾いていく砂浜。

何もかもが干涸らびて、飢えて灼熱の太陽に照らされて、元の姿を失っていく。

死につつある生き物たち。

私が『海』を奪ってしまったから。

私が『海』を吸収してしまったから。

望んだ訳じゃないのに。

ここは、かつて海であった死の砂漠。そして全ての生き物たちの墓場。

私は私の中の『海』を殺しながら、生きている。

中学生は、半端な生き物だと思う。大人でも子供でもない。だけど人間である事だけは確かだ。

そうと気付かないのか、人間扱いしない人もいるけど。

人間は傲慢で我儘で、自分勝手な生き物だ。

大人も子供も。

そして、私も、大人でも子供でもない、中途半端な生き物で。

初潮を迎えていない私は、女ですらない。

本当に半端な生き物。

大人は嫌い。

子供も嫌い。

同年代も嫌い。

男は嫌い。

女も嫌い。

自分も嫌い。

……嫌いなものばかりだ。

うんざりする。

私、水原和紗みずはらかずなは中学二年。部活はしてない。委員会みんぱいは図書。趣味は読書。特に親しい友人はいない。欲しいとも思わない。

同年代とは、会話してもつまらない。彼らと私に、共通項はほとんどない。

私は彼らに合わせようとしないうし、彼らも私に合わせない。

だからまともなコミュニケーションは成り立たない。  
興味があるものが違い過ぎるのだ。

私はテレビを見ない。漫画を読まない。雑誌を買わない。

朝一番に本を返して本を借り、昼休みに返してまた借り、放課後返してまた借り、という具合だ。

我が校の図書室では一度に一冊しか貸し出し出来ないのと、他の時間は開いてないため、そのペースである。

図書室は四時半で閉まってしまう。

また、時間に図書委員がいなかったりする。

そんなもの、いなくとも勝手に書類に書き込んでしまえば良いわけだが。

図書室の戸を開く。……相変わらず、閑散としている。返却手続きの為、カウンターへ向かう。

「……や！ おネエ」

相手の顔を見る。一学年下の笠間篤志。かひまあつし

「……ああ、一年坊主。今日は君が当番か？」

彼は校内でほとんど唯一と言って良いくらい、話の通じる相手だ。学年は違つし、部活も委員もしていないから、遭遇頻度はそれほど高くないが、彼が図書委員であるために、月に数回くらい顔を合わせて会話する。

「一年坊主はよして下さいよ」

そう言つて笠間は苦笑した。

坊主頭だけど、可愛らしい顔をしている。彼の印象は、いつも笑顔だ。楽しそうに屈託無く笑う。

「相棒は？」

「本人曰く、部活だそうぞ」

「笠間、君は水泳部の筈だろう？」

ならば条件は同じ筈だ。

「今日は雨で休み」

そうか。雨だと休みになるのか。

「しよつちゆう休みだな。でも、相方つて何部だっけ？」

「さあ、俺の記憶によれば『帰宅部』だったとちよつと待て。」

「それつて、つまり」

もしかしなくても、サボリなのは。

「デートでしょ？ 色付きリップなんか塗つてたし」  
思わず呆れた。

「……笠間、君は女に利用されるタイプだね」

「そんな事ないでしょ？ これでも結構ラブレターとか貰うんでモテるんですよ」

そうなのか。坊主頭なのに。

「良かったね、相手にして貰えて」

「ひどい言い方っすね。ナイーブな俺のハートはズタズタですつて笑いながらさらりという度胸は買つてやりたいのだが。」

「ほお、そのナイーブなハートつて奴を見せて貰おうか？」

笠間の言動はどこまで本音が判らず、信用ならない。軽く睨むと……あ、返却ですね」

急に事務的な表情になり、『返却済み』という横長の印をぽん、ぽん、と貸借帳簿と図書カードと個人カードに押して、カード二枚と本を渡す。

「元のところ、返して置いて下さいね」

「判つてる」

言つて、本を返して、続きを取る。同じ作家のシリーズ物だ。海外ファンタジー物。

「はい」

カードに書き込んで、渡す。笠間は今日の日付印を押す。

「好きですねエ、姉御も」

「基本的に、好き嫌いはない。あと、二冊でシリーズ読破だ」

「次は何借りるんですか？」

「予定ではチエーホフ」

「本当、脈絡ないですね。どういう基準で？」

「何となく。その次はエラーリー・クイーンかアガサ・クリスティー」  
「おネエって本当、変わってますね。『校内変人グランプリ』ってのがあったら、文句なしに姉御がナンバー1ですよ」

「なんだ、それは。」

「……褒められてるようには聞こえないな」

「何言ってるんですか。俺は本気で尊敬してますよ。敬愛してます」  
「嘘をつくな。」

「真面目に当番やりなよ」

「そう言っつて、本を鞆に詰め込む。」

「もう、帰るんですか？」

「今日は験げんが良くない。こういう時はさっさと家へ帰って玄米茶が一番」

「そう言っつと、笠間は肩をすくめる。」

「玄米茶、ね。俺も嫌いじゃないですけど」

「玄米茶と煎茶はどうして喫茶店のメニューに無いんだろうね？」

「茶を喫むと書いてどうして『茶』を出さないんだ。下手すると紅茶すらメニューにない店もあるぞ」

「本気で思っつてそう言っつと、笠間はにっこり笑った。」

「この間、日本茶専門の喫茶店見つけましたよ？ 今度、一緒にどうです？」

「そんな金があったら本を買う」

「おごりますよ」

「それは大変魅力的だ。心惹かれる。」

「……おごりか……おごりなら……でも、ま、いいや。年下に奢らせる訳にいかんですよ。気持ちだけで良いよ」

「……えっ？ ……いや、そんな……」

「じゃあな、笠間。頑張れよ」

「私が笑っつてそう言っつと、笠間は困ったように笑った。」

「……雨、降ってるから気を付けて」

「さんきゅ」

笑って、図書室を出る。

笠間はイイ奴だ。弟がいたらあんな感じかな？

本の趣味も割と合う。

文学系は読まないが、SFとかファンタジーとかアクションとか古代物・歴史物とか。

時折、小説を貸してくれたりする。

『姉御』とか『おネエ』とか呼んで慕ってくれる、結構可愛い奴だ。

一応、水泳部の期待の星、らしいが、残念ながらうちの水泳部はあまり強くないので、どのくらいの期待の星かは良く判らない。ま、部活も入って二ヶ月だし。

さっさと帰って、玄米茶と醤油煎餅でティータイムして、それからゆっくり本を読もう。

傘を広げて、歩き出す。

ぱらぱらという雨の音が気持ち良い。

雨は嫌いだという人もいるらしいが、私は好きだ。

人の話し声より、雨音の方が断然良い。

雨の時は、何だか普段より匂いが強く感じられる。

雨の匂い。草の匂い。空気の匂い。

目を瞑って歩く。ぱらぱら踊る雨の音。

とても、とても、気持ち良い。

気分の良い小雨の時は、傘を差さずに歩くともっと気持ち良い。

……ただ、冬服だと乾きが遅くて後で困るけど。

夏服だと上が透けるといふ難点もあるんだけど、ね。一度やって大変困った事がある。他にどうしようもないから、そのまま帰宅したが。

鍵を開けて、家に入る。

ただいまは言わない。

昔は言ってたけど、今は誰もいないから。



誰もいないのに、わざわざ挨拶なんて馬鹿らしい。  
無駄な事だ。

かちゃん、と鍵を掛ける。

真つ先に台所行つて、薬缶に水入れて火を付ける。

それから自室へ。鞆置いて着替え、鍵付きの引き出しから日記と写真を取り出す。

……若い頃の父親の写真。隠しておかないと、捨てられるから。まだ、大丈夫。見つかってない。引き出しに閉まって鍵を掛ける。残り一枚。最後の写真だ。他の写真は皆母親が捨てた。別に父親は好きじゃないけど、人の顔写真を捨てるのは忍びなくて、取つてある。

たぶん、一生見る事のない人の顔。

話を聞くに、相当人迷惑な男であつたのは確かだ。現物は見た事も会つた事もないので 本当は三歳くらいまで生活してたらしいが 想像するしかないが。

母親は、私の父の親戚が嫌いらしい。私も嫌いだ。特に祖父。幼い頃に浴びせられた数々の暴言は、未だに忘れられない。大人になつたら殺してやると、堅く心に誓っていたが、最近どうでも良くなつた。私も随分丸くなつたものだと思う。

お湯が沸いたので玄米茶を入れる。醤油煎餅を押入から出してくる。

「……ふう」

この瞬間が、至福の時。誰もいない方が良い。

自分一人の方が気楽だ。

友達も家族も何も要らない。

一人、ぼうつと好きなお茶に浸る時。それが一番幸せ。

一人、本に没頭するひととき。それが私の幸せ。

誰にも邪魔されない、一人の空間こそが私の最高の幸せだ。

もう一杯玄米茶。ふう。

……あ、そろそろ五時だ。支度しなきゃ。

立ち上がったお茶を片付ける。

本と日記は後回しにする事にして部屋へ。

それからエプロン。

きゅうりを切ってじゃこ酢の物。玉葱ジャガ芋人参刻む。

小松菜茹でて、カットして。

鶏肉切つて、塩胡椒で炒める。

片手鍋に鰹だし入れて煮立てて鰹を取って、豆腐賽の目にカットして入れて火を止める。

カボチャの煮物、昨夜の残り、レンジでチン。

干しシヤマを四匹焼く。

「ただいま」

「おかえりなさい」

冷蔵庫から味噌を出して、片手鍋に入れる。器を出して、料理をよそつ。

「お母さん、ビール？ それともお茶？」

「……ビール」

「あと、残り中瓶三本だよ」

「判ったわ」

母の返事を聞きながら、一本だけ出す。……疲れた顔。厭な顔だ。

でも、おくびにも出さない。

「お風呂、沸かしてくるね」

「枝豆は？ ないわね」

「ごめんなさい」

慌てて謝った。

「買ってくるわよ、ビールと一緒に」

鼻を鳴らして母は言った。

「……うん」

風呂場へ走る。

……良かった。今日は怒鳴られないかも。

ちよっとほっとする。

栓をしてお湯を捻って溜まるのを見る。

どどどど、と水が浴槽に流れ込んでいく。

水の音は好きだ。

ほっとする。

水の流れる音は良い。

人の声などよりずっと良い。

一人で水の流れるのを見るのが好きだ。とても。

……溜まったので、お湯を止めて、湯沸かしスイッチを入れる。

風呂場を出る。

台所へ戻って、時計を見る。六時十九分。

母親はビールを飲んでいる。

このところ、ビールの減りが早い気がする。

そんな事言ったら怒鳴られるのだろうけど。

養われてる身で文句は言えない。反抗する術はない。

頼れる身内は母のみで、母は私を押し付けた父を恨んでいる。

母は天涯孤独で、父の親戚は私達に冷淡で、母親がこうなったの

は、全て父方の親戚のせいだと言う。

金の切れ目が縁の切れ目というのが全く本当だ。

父親のしでかした不始末のため、父方の親戚は手の平を返したよ

うな仕打ちをするし、借金取りや何やら来たりして、金になるもの

は全て処分したため、思い出の品など何一つまともに残っていない。

母親はすっかり荒れてしまった。

元の母がどういいう人だったかなんて知らないけれど、僅かに残る

昔の写真からすると、母はとても優しく穏やかな微笑をする、美し

い人だったようだ。

……抱きしめられた記憶はあまりないけど。

別に私は不幸じゃない。

取り合えず生活できてるし、食事も服も与えられてる。

母親の機嫌を取っている限り、私の安全と自由はある程度保証されてる。

殴られない限りは、幸せな日々だ。

それで良い。

それ以上望まない。

平穏な日々。

自分の一日で精一杯だから、他人の事など構ってられない。

ただ、殴られないために、怒鳴られない為に生きてる。

そして本を読む。

私の幸せ。

ご飯と味噌汁をよそう。ビール飲み終わったので母親の分も。

あ、そうだ。お風呂。

止めに行く。

うん、大丈夫。丁度のお湯。スイッチ消す。台所へ戻る。

母親はとうに席を立て居間にいた。テレビを付けて、横になっている。

「お風呂、沸いたよ」

「……判った」

椅子に座る。両手を合わせて。

「いただきます」

食べ始める。

シヤモはもう、冷たい。でも、おいしい。

……好きだけど、高いんだよね。

明日は何か面白い物しなくちゃ。

何が安いかな。

バイトがあるから早起しなくちゃ。

カボチャ、また残っちゃう。

どうしよう？

まだ、保つかない？

そろそろ駄目？

明日の朝も食べようか。

もし、駄目だったら捨てなきゃ。

ゴミの日、明日？

……違う。明後日だ。

良かった。

食べ終える。

母親の分も食器片付け、洗う。乾燥機掛けて、ほっと一息。

「……部屋へ戻るね」

返事はない。物音立てずに自室へ戻る。戸を閉めて、ようやく安堵した。

これからは本当の自由な時間。

日記と本を手に取って、ベッドへ寝そべる。

まず、日記を書いて。内容は適当。

適当が一番。それが長続きのコツ。

丁寧に書こうとしたら、何度か挫折した。

分刻みで本日あった出来事を記入したのだ。そういうのは駄目。

無理。挫折した。

だから適当。

取り合えず、今日借りた本のタイトルを書く。

それと笠間がお茶専門の喫茶店の話した事。

……あ、そうか。今日帰り機嫌悪くなかったの、笠間のおかげか。

イイ奴だな。

あんなのが弟だったら、もう少しこの家、和んでたかな？

……いや、一人育てるのも苦労したとぼやいてるんだから、もう

一人いたら、母親発狂してたかも。

それは困る。

鍵付きの引き出しを開けて日記仕舞って、また閉める。

ベッドに戻って本を読む。

ピアズ・アンソニーは好きだ。

なんか個性豊かなキャラクター達がひしめき合っていて、楽しくなる。

でも、作者は照れ屋な皮肉屋さんかな？

なんとなくそついう感じ。

本の世界は別世界だ。

別の世界の異次元空間。

雨や水の音と同じ。

私を楽しくする存在。

ずっと、ずっと、こうしていたい。

何も考えたくない。何も考えないで、没頭したい。

幸せな時間。幸せな空間。

私は幸せな世界に没頭する。

読んでいる間、『海』の音は、聞こえない。『海』の光景が見えたりしない。

## 第一話 好きなもの、嫌いなもの（後書き）

十代の頃に、コバルトに投稿しようと思って書いた小説です。あまりの臭さに投稿前に没にしたんですが。

古いデジタルデータでかろつじてTEXT変換して保存してあったもののリライト版。

なのだけど、データが途中で破損していてバックアップなし。

もっとも元のは、ここまでやったらずいすぎじゃ？というくらい。昔の少女漫画的展開だったので（庭木に電飾巻いてハッピーバーズデーとか）わりと普通（？）にしたいと思います。

## 第二話 冤罪

翌朝、新聞配達のバイトして、朝食取って学校へ行った。  
教室寄る前に図書室へ。当番はいなかったなので、勝手に返却して勝手に借りる。

……誰だ？ 当番。二年一組。……ああ、長谷川・高村ペアか。仕方がない。代わりに当番していくとするか。  
図書委員でもないくせに図書当番を代行する。  
暇だから別にかまわない。

文句も言われないから、平気だろう。

予鈴が鳴って、教室へ行った。私が入ると、何故かざわめきが一瞬、消えた気がした。

「？」

だが、また元通りになったので、気にせず座る事にした。  
鞆を掛けて、椅子に座ろうとして気付く。

椅子の上に画鋏。

……何だろう？と思いつつ、画鋏を拾い上げる。  
見ると、周辺にいつぱい落ちている。

すぐ傍の教卓の上に画鋏の入れ物が蓋を開けて置いてある。  
その中へざらざらと入れる。……どうやら、これからこぼれたらしい。

全て拾い集めて中へ入れる。

それから座った。本鈴が鳴った。

担任教師がやって来る。

「起立」

「礼」

「着席」

出席を取り、朝礼をする。それから。

「水原さん、一限目終了後、職員室まで来なさい」



村西由貴子先生はそう言った。

「はい」

教室はざわめいた。

……何だろう？

何か集金払い忘れたかな？

思いつつ、一限の英語が終わった後、職員室の村西先生の処まで行く。

「失礼します」

「水原さん、こっちへ」

固い顔した先生に、生徒指導室へ連れて行かれる。

…何だ？ 職員室じゃ駄目な事？

「先生、とても残念だわ」

そう言われても、何の事だか判らなかつた。

「はい？」

思わず聞き返した。

すると先生はとても悲しそうに眉をひそめて話し始める。

「あなたのような優秀な子が、同級生を卑怯な手段で虐めるだなんて、未だに信じられません」

「……は？」

何の事を言われているのか、全く判らなかつた。

すると先生は厳しい表情になる。

「惚けても無駄です。二組の田野さんと広田先生から事情は聞きました」

「……はあ！？」

全然わけが判らない。

何が言いたいのかも判らない。

田野景子たのけいこは一応顔と名前は知っている。

何故か私を目の敵にしている同学年の女子生徒だ。

私は全く身に覚えがない。

時折妙に喧嘩腰に話しかけられるけど、面倒なのでいつも相手せ

ずは無視している。

「……事情って何ですか？」

心当たりは全くないが、一応尋ねる。

「この期に及んで往生際の悪い」

先生は不機嫌そうに私を睨む。

私にはさっぱり意味不明だ。

「あなたは彼女のクラスの女の子を使つて、田野さんを見無視したり、机や椅子を汚したり、画鋏を靴箱に入れたり、何ヶ月にもわたって執拗なひどい虐めを繰り返したそうね」

「……初耳です。心当たりはないです」

だいたい、そんなに親しい友人知人などいない。

それは同学年の女子生徒に聞けば、すぐ判るはずだ。

「田野さんが嘘をついてると言うんですか！？ 彼女は昨日、怪我をしたんですよ！！」

そんなはずはない。

会つてもいない人間に、どうやって傷を付けられるというのだろうか。

私は決して超能力者ではない。

だが、不思議だ。

「……怪我？」

怪我をしたと言っているという事は、実際に怪我があるのだろうか。

「靴の中に剃刀が入っていて、それで切つたんです。以前からこんな事をされていたと泣きながら、彼女は言つたんですよ」

それが本当だとしても、絶対に私ではない。

私が一時的に記憶喪失になっているというなら、話は別だが。

「知りません。誤解があるようです」

「なんて卑怯な子なの、水原さん。先生、信じられない。あなたがそういう態度を取るのなら、お母さんを学校に呼びますよ」

ゾクリとした。

母親を呼ぶ。それだけは嫌だ。  
絶対嫌だ。

それくらいなら死んだ方がマシ。  
後で母親に何されるか考えたら……。

「素直に認めないならお母さん呼びます」  
先生は厳しい表情で言った。

「……どうして信じてくれないんですか」  
話すら聞いて貰えない。

「あなたはどうして本当の事を認めないんですか!!」  
教師は逆上していた。

……駄目だ、と思った。  
こういう人間には何を言っても無駄だと知った。

……母親がそうだ。  
ぎり、と唇を噛んだ。

「……認めれば良いんですか。たとえ嘘でも私がやったと認めれば  
良いんですか」

なんだか悲しかった。  
とても空しかった。

「過失は認め、謝罪するべきです。そして罪を償いなさい。それが  
人間としての務めです」

どうやら私は、彼女をわりとりベラルな人だと思っていたが、大  
きな間違いだったらしい。

目の前にいるのは、ひどく感情的で直情的な、ヒステリックで視  
野の狭い、口うるさく、自分の非を死んでも認めたりしない、女だ。  
溜息をついた。

諦めた。

「……判りました。謝罪します。それで宜しいですね？ 村西先生」  
そう言つと、彼女は安心した顔になった。

「判れば良いのよ、水原さん。さあ、二組へ言って謝りなさい」  
……たぶん、私はこの先生を一生恨むだろう。

私が一番、恨むべきなのはおそらく、田野景子だが、実際に私が恨むのは村西先生だと思った。

田野景子の意図は不明だ。

少なくとも敵だ。

味方ではない。

だが、担任の村西が一番の敵だと感じた。

しかし幸いにも、私の感情は顔には出てないらしい。

有り難い事だ。

だが、おかげで嘘を現実と認める事になる。

この教師が、母親が私にとってどういう存在だか知らない。

それでいて、その母親を盾に、私に無実の罪を押し付けるのだ。

『信じられない』と言いながら、私を頭から疑っている。

……やっぱり大人に、ろくな人間はいない。

美人で優しげで好意を抱いていただけに、ショックは大きかった。

最低だった。

信じられないのはこっちの方だ。

言われるままに、田野景子に謝罪に行った。

田野景子は一言も口を利かなかった。

ただ無言で私を睨みつけていた。

私は全く何もしていない。

それを知っている唯一の人間で、実際それをやった張本人のくせに、被害者のような顔で私を見ている。

何故そんな顔をされるのか判らない。

気持ち悪い。

……吐き気がした。

私は教室を出て、真っ直ぐ屋上へ向かった。

校舎の空気はよんでいる気がして、外の空気が吸いたかった。

ここは息苦しい。

生活できる場所じゃなかった。

しばらくぼうつとしていた。

今日は良く晴れていた。

雲は多かったけど。気持ちの良い風が吹いていて、何だかほっとして、気持ち良くて、そのまま眠り込んだ。

昼休み、教室へ戻ると、私の机の周りに紙の切れ端がいっぱい散らばっていた。

見ると、それはノートや教科書だった。

周りを見る。

皆、目を逸らす。

視線を合わせる者はない。

ため息をついた。

机の中の教科書や辞書はあらかたなかった。

……ただじゃないのに。

うちの経済状況を考えれば、これらを揃え直すのは苦勞だった。

少なくとも、母には言えない。

私のバイト代から出すとしても……かなりきつい。

中学生がやれるバイトなんて知っているのに。

鞆の中を開く。

ほとんど空だ。

さすがに家の鍵などはそのままだった。

財布は常に持ち歩いているので大丈夫。

今日は買い物するつもりで多めに持っていたので、つくづく持つてて良かったと思った。

誰がやったか知らないが、実に卑劣で最低だ。

無実の罪だと思うと、尚更腑が煮えくり返る。

と、はっと気付く。

図書室で借りた本がない。

慌ててもう一度探す。

ない。

どこにもない。

「……本をどうしたの？」

私は尋ねた。

誰も答えない。

「図書室の本よ！ 私の物じゃないわ」

思わず怒鳴った。返事はない。

誰も私の目を見ない。

自分の眉間に皺が寄るのを感じた。

許せなかった。

公共の物にまで手を出すのは反則だ。それだけは絶対許せない。

誰も答えない。

ゴミ箱やロッカーも探す。

何処にもない。

痕跡すらない。

だんだん、探し方が荒っぽくなる。

がたん、ばたん、がたん、ばたん。

頭にすっかり血が昇っていた。誰かが背中をとん、とつつく。

振り向いて相手を睨み付ける。

「何？」

「……さつき、誰かが窓の外、放り投げてたわ」

同じクラスの長月聡美。ながつきさとみクラス委員長。

「誰か？ 見てたんじゃないの？」

声が尖った。

「……忘れたわ、良いでしょう？」

忘れた、ね。

冷笑していた。

「長月さん、良い事をしたって思ってるつもり？」

私は楽しくもないのに、笑っていた。

「……自分だけ善人みたいな顔しないで」

言い捨てて、走り出す。

外へ出て、校庭を探す。

……何処かこの辺。窓から投げ捨てたのなら。

必死になつて探す。

あつた。

泥だらけ。

一瞬、体の力が抜けた。

だけど、気を取り直してポケットティッシュで泥を拭う。

ページは破れていない。

表紙は汚れ防止と補強のために、補強フィルムでコーティングしてあるから、拭けば取れる。

ページの端が少々汚れたけど……大丈夫。これなら。

ようやく、息をついた。ほっとする。

だけど、またいらいらと苛立ちが込み上げてくる。

何故、こんな事をするのだろう。

理解できない。

皆私が彼女を虐めた、と思うからこういつ事するのだろうか？

だとしたら、何か間違つてない？

私が出たと思われている事を、誰かが私に対してするのなら、その時点でその人も同類で、そうされる資格があるって事だ。

パラドックス。

同じだ。同じじゃないか。どう違つて言うのか説明して欲しい。

剃刀？

何よ、それ。

少なくとも、やった当人は私が犯人じゃない事を知っている筈だ。

私はやってないもの。

確かに田野景子は好きじゃない。

だが、その一番の原因は、彼女が私を目の敵にして嫌っているからだ。

自作自演なのか、本当に誰かにやられたのか。それすらも不明だ。

私は、何も知らない。

理由も、原因も、何もかも。

本はまだ読んでないけど、返しに行く。

読もうという気にはなれなかった。

図書室に行く。当番はいなかった。勝手に手続きをして、本を返  
しに、書棚の方へ行く。

「……おネエ……」

笠間、だった。心配そうな顔。腕組みしてたのを外して、こちら  
に近寄ってくる。

「……おネエ、大丈夫？ ヤな噂、聞いて」

もう一年のクラスにまで伝わっているのか。

おそらくは、朝の時点で広まったのだろうと思う。

誰が広めたのかは不明だが。

笠間は心配そうに言う。

「……大丈夫。俺はおネエの味方だよ。おネエは絶対そんな事する  
人じゃない。何か、事情があっただら？ 誰か庇ってるの？」

真剣な顔で。

思わず、泣きそうな気分になった。

ぐっところえる。

「……庇ってるなら良かったけど、決め付けられたんだよ。お前が  
やっただけに決まってる、ちゃんと認めて謝罪しろってそういう口振り  
だった。人の話、一言も聞きもしない」

「……おネエ」

笠間が顔をゆがめた。

「人の視線なんか、何がどうだってそんなの、気にしないけど……  
頭キタ。図書館の本、投げ捨てられたし」

他のことは、この際、どうだって良い。

どうだって良くなっていた。

この騒ぎが収まるまではもう、図書室の本は借りられそうにない。  
同じ事が繰り返されないという保証がない。

本当に、嫌な気分だ。

「……俺、担任に言っただけでやるよ。だっておネエ、やってないんだし。  
放課後のアリバイだって何とか言うよ」



「……どうして？ 私が絶対やってないって証拠あるの？」  
「だって」

悔しそうに、笠間が唇を噛んだ。

「だって、おネエがやるはずないだろ、そんなこと」

その気持ちが嬉しかった。

トゲトゲしかった気持ちが、和らいでいく。

「……良いよ、心配させて悪かった」  
嬉しい。

でも、参った。

何でそんな必死な顔するんだ。他人事なのに。

「気にしなくて、良いよ」

私は笑った。

心の底から。

「おネエの事だから、気にしてるんだろ」

笠間は何故か傷付いたように言った。

「気持ちだけで、有り難いから」

苦笑した。

そう言って、本を棚に返す。離れようとする腕を、掴まれる。

「？」

きよとんとした。

笠間が真っ直ぐな目で私を見る。

「おネエの事じゃなかったら、俺、こんな気にしないよ」

真剣だった。

こんな顔、見た事なかった。

何だか、胸が痛かった。

……凄い、イイ奴だ。

思わずじわりとくる。

「……有り難う」

私は微笑んだ。

「判ってねエよ、おネエ！！」

「…………え？」

泣きそうな顔で、笠間は叫ぶ。

「全然判つてねエよ！！ おネエは！！ それとも、こうい言うい方が悪い訳！？ ……俺はっ…………頼りにして欲しいって言ってるんだよ！！ 和紗！！」

初めて、名前で呼ばれた。

「…………人の名前、勝手に呼び捨てするなよ。年下のくせに私がそう言つと、笠間は無言でぶいっつと背中を向けた。

「笠間？」

「…………一コしか違わねーよ。コドモ扱いすんなよ！」

「判つてる。ちゃんと男だよ、笠間は」

「判つてない。俺は…………力になりたいんだよ  
すごく嬉しかった。

「そう言つてくれるの、笠間だけだから、嬉しいよ。とても。笠間がいてくれて良かった。本当に、そう思うよ」

そう言つと、笠間は不意に抱きついてきた。

「…………えっ…………？」

私は驚いた。

「…………忘れるなよ！！ 俺が…………俺が何があつても…………味方だつて」  
「…………ありがと、笠間」

ぼん、ぼん、と笠間の背中を叩く。

笠間の体は暖かい。

私と同じくらいの背丈で、肩幅もそんな変わらなくて、ちょっと華奢な感じだけど、こうやって触れてみると、違う。

水泳やつてるせいか、肩の筋肉とか、胸の筋肉なんかもしっかりしてて、『男の子』って感じた。

匂いも違う。

男の子の体臭とシャンプーの匂い。

笠間は、何故か震えていた。

泣いてるのかと思つたけど、違う。

何だろっ？

良く判らない。

震えながら、でもしっかりと抱きしめて、離さない。  
小さい子供をあやすように、ぽん、ぽん、と背中を叩いた。  
ぎゅっと笠間は私の首筋に顔を押し付けてくる。まるで母親に甘える子供みたいに。

少しずつ、震えは小さくなっていく。

少しずつ、体の緊張が解けていく。

笠間は、顔を上げた。

至近距離。息が顔に掛かりそうなくらい。

「俺の事、どう思ってる？」

「……え……？」

真顔で不意に聞かれて、ぽかん、とした。

「何、急に。びっくりした」

すると途端に笠間は狼狽して、飛び離れる。

「あっ！！ イイ！！ 今のなし！！ 忘れて！！」

「……は？」

何なんだ？

きよとんとする。

「……おネエ、今の……どう思った……？」

「へっ？」

「……いや……その……抱きしめた事……」

笠間は真っ赤な顔で、消え入りそうな声で言った。

「ああ」

にっこり笑った。

「気にしてないよ、全然」

そう言つと、笠間は泣き笑いのような表情になった。

「笠間？」

心配になって近寄ろうとすると、笠間が慌てて身を引いた。

「あ、いい。気にしないで、おネエ。気にしなくて、良いから」

様子が変だ。

「どうしたの？」

尋ねると、困った顔をされた。

「おネエ、人から鈍感って言われるでしょう？」

「……そうだね。ま、否定はしないけど」  
頷いた。

「……何て言うか……」

「はい？」

きよとんとした。

「……おネエって……かなわないや」

「……どうしたのよ」

理解し難い。

「……好きだよ」

にこり、と笠間は笑った。

「うん、私も好きだよ」

笠間はちよっと困ったような顔をする。

「でも、本当、力になるから」

「さんきゅ」

その場を後にする。

笠間の溜息を聞いたような気がして、振り返ったが、笠間は笑顔で手を振っていた。

私も手を振り返す。

そして図書室を出た。

「……さて……授業、どうしよう？」

教科書もノートもない。

たぶん、借りに行っても誰も貸してくれないだろう。  
溜息をつく。

取り合えず教室戻る。

鞆は、傷だらけだけど一応無事だ。

鞆を持ち上げる。

視線を感じた。無視する。

そのまま教室を出た。

誰にも声掛けられなかった。

そのまま玄関へ直行し、外に出た。

誰にも見咎められなかった。

真っ直ぐ家へ帰る。帰って着替えた。

……さて。

バッグに財布やらハンカチやら鍵やら詰め込んで、外に出る。

本屋へ直行。

無料の求人情報を立ち読みする。

バイト情報を探す。

……何か……条件、どれもこれも中卒以上……なんだけど……これ……。

はあ、とため息をつく。

考えた。

今、私は誕生日前だから十三歳だ。

だが、十三も十四も大して変わらない。

それがあと一つ、増えたところでどうだっていうのだ。  
よし。

……中卒以上で探す。これなら、いくつがある。

時給良い方が良いな。それで、出来たら昼間。

早朝と夕方は新聞配達だから。

夜はお母さんにはれる。

あった。じゃあ、持って帰るか。

……履歴書が必要？

履歴書って何書くの？

判らない。

書き方なんか書いてない。

まあ、いいや。何とかなるだろう。

文具のコーナーの履歴書を手に取る。

良かった。裏に、例が出てる。  
そうか、こんなの書くんだ。

あと……ボールペン。

「これ、下さい」

履歴書とボールペンを買う。

……証明写真？

えっとあれ？ あの四角い箱。

百円玉を入れて。三回音がして、出てくる、顔写真。  
顔しか出てない。これを貼るんだな。

バッグに写真を仕舞う。

それからスーパーへ買い物に行く。

あ、豚肉特売。

冷凍食品半額セール。

やった。

野菜……高いなあ。野菜何か特売してないの？

あ、曲がりきゅうりが安い。これ買って行こう。

ああ、どうしよう。

今日の献立。

カレーにしようかな？

じゃあ、お肉買わなくちゃ。

……牛か鶏。とりあえず鶏肉で。

ジャガ芋玉葱人参は山のようにあるんだけど……青物が欲しい。  
どうしよう？

あ、ほうれん草が安い。じゃ、これ買おうっと。

……他は……また今度にしよう。

あれ？ でもカレーライスとほうれん草？

……うう、カレーライス一品でも良いよね？

あ、でもお母さん、また飲むかな？

チーズ買って行こう。あとするめ。

……他何か無いかな。安くて手頃なの。

ああ、そうだ。枝豆。

うん、これで良い。

……もう帰ろう。

レジに行つて会計する。

「小さいのにもいつも偉いわね。でも、今日学校は？」

レジのおばさんに声掛けられる。

「……え……その……今日は気分が悪くて早退して……」

嘘だけ。

「あら、まあ！ それは大変。早く寝なくちゃ」

「大丈夫です。有り難うございます」

私は頭を下げた。

「本が良い子ねえ。ちゃんと挨拶できるのね。うちの子にも見習わせたいわ」

私は曖昧に笑う。学校サボつて褒められるとは。

お金を支払う。

「有り難うございました」

頭を下げて、店を出る。

家へ帰る。

写真を履歴書に糊で貼り付ける。

それから見様見真似で履歴書を書く。

年を二年誤魔化さなくちゃいけないから、一生懸命計算する。

判らなくなつてチラシの裏に今年の年号を書き、表を書きながら逆算する。

それから出した数字を参考に、履歴書を完成させていく。

そして電話をする。中卒のフリーターだ、という事にした。

明日面接をするから、三時に履歴書を持って来て欲しいとのこと。

よし。期待に胸は膨らんだ。

もう一度履歴書をチェックする。大丈夫。書き損じはない。

ふう、と息をついた。

……何をしてるんだろう、私。

ふと思った。

でも、お金は必要だった。

教科書もノートもないのに学校行っても仕方がなかった。

笠間に会えないのはちよつとつまらないけど、それよりお金だ。

何ヶ月か働いて、それから辞めて教科書・ノートを買って学校へ行こう。

私はあまり深く考えていなかった。

ただ、必要だと思ったから、そうするだけだった。

それが他人にどう思われるかなんて、全く気付きもしなかった。

……そう、笠間の言う通り、私は全く鈍感なのだ。

その事に、この時、全く気付いていなかった。

それが重大な事件を引き起こす事を。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0227c/>

---

私の中の『海』

2011年10月3日19時09分発行